人権啓発コーナー No.18

差別のない明るいまちを

ほんとうのパートナーシップを求めて

「女がこれ以上強くなったらどうするんで」

何度か、男性から聞いた言葉です。

戦後も六十余年となり、今さら「戦後強くなったのは、女性と靴下」ではありませんが、「女性イコール弱者」といったイメージは、過去のものになりつつあるように思います。

それを表す事象として「団体旅行の参加者は、大半が女性である」、「ちょっと高級なレストランには、友だちどうしで女性がたくさん来ている」などの例がよく挙げられます。

しかし、こういったことが「真に女性が解放された」、「男女がほんとうに平等になった」ということでしょうか。

《これって　おかしくない？》

言葉の中に生きている例として

○女のくせに……
○男のくせに……
○女の腐ったようなやつだ
○男は……すべきだ
○女は……すべきだ

などがあります。

近代日本では、長い間家族制度の中で、男性が絶対的な力を持つという時代が続きました。その中で「男性は外、女性は内」、「男性は公的領域、女性は私的領域」という形になり、日常生活での女性差別があったのではないでしょうか。

男性の中には、女性に対する差別意識のようなものがいつの間にか、自然に入り込んでいたように思います。それは、皆さんの中にある「暗黙の了解」のような形になっていたようです。

多くの女性は、その不合理に気付かず、それに従ってきたのかもしれません。一方、男性にしても、必ずしも意識的に差別をしてきたわけではなかったと思います。しかし、気づかないことで、長く問題が温存されてきたのではないでしょうか。

身近な生活の中で人権問題（女性問題）につながる事柄をとらえ、男性もなく、女性もなく、同じ人間として考えていこうとする視点が大切だと思います。

《これも　おかしいのでは？》

◆「都合がよい時だけの平等論」

男性からこんな声も聞かれます。

「女性はある時は『男女平等』と言い、ある時は『私は女だから無理です。できません』と言って都合よく使い分けている」というのです。こういったことについては、見直していくことが必要です。

女性も一人の人間として、自立して、凛として生きていく姿勢を持たなければならないと思います。

◆「幼稚園の男性教諭について聞いた話より」

ある自治体で四人の男性が幼稚園の教諭として採用されました。四人は、「念願の幼稚園の先生になれた」という嬉しさで、張り切って保育に取り組んでいました。

しかし、四人のうち三人は潰れてしまったといいます。それは、初めのうちはよかったのですが、そのうちに「あなたは男だろう。これやって」から始まり、「男なのにそんなこともできないの」、「男のくせに頼りにならんな」、「男のくせに、男のくせに……」

とうとう二人は退職、一人はうつ病になってしまったそうです。

今、「人権の世紀二十一世紀」を迎え、「真の男女平等とは？」、「真のパートナーシップとは？」と問いかけてみたいと思います。

それは、単に「平等を求める」とか、「弱かった女性が強くなる」ということではないと思います。

お互いが自分のことばかり考え、権利を主張すると、ぎすぎすした人間関係になってしまいます。

どちらかが強い立場になろうと願うのではなく、一人の人権を持った人間としてお互いを大切に思い合い、いたわり合って生きていくことが大切だと思います。

人間は、さまざまな面で、さまざまに違う、つまり多様な個性を持った存在です。それらが、「女性らしさ」、「男性らしさ」を超えて「人間らしさ」、「その人らしさ」として認められることが大切ではないでしょうか。それらの違いをお互いに認め合い、男女の固定的役割分担に押し込めることなく、互いの個性や可能性を尊重し合い、自立した対等な関係を育んでいって欲しいと思います。そして、互いに思い合い、いたわり合って親密な関係を作りあげていく。これが、ほんとうのパートナーシップではないでしょうか。

人権の詩

飾り物

相田みつを

あのねえ
財産　肩書　地位
名誉　その他
自分についている
誇り高き飾り物を
みんな落として
すっぱだかに
なってごらん
人間としての本当の
自分がわかるから

引用　相田みつを
『心の詩1　アノネ』
ダイヤモンド社

《今月は、固定資産税１期分の納付月です。》
忘れず納期限内に納めましょう。